



～ 夢ひとすじに ～ 宮原中だより

自ら学び 心豊かに たくましく

平成 25 年度 第 9 号

平成 26 年 2 月 3 日 (月) 発行

さいたま市立宮原中学校

メールアドレス

miyahara-j@saitama-city.ed.jp

ホームページアドレス

<http://miyahara-j.saitama-city.ed.jp/>

「心の温度を合わせる」

校長 ^{やま} ^{した} ^{せい} ^じ
山 下 誠 二

「心の温度が、やっと合ってきた」・・・木村先生が、こうつぶやきました。

青森県弘前市にある弘前市立豊田小学校の隣りに豊田児童センターがあります。27年前は忙しい親たちのための保育園の延長のような存在でした。そこに赴任してきた木村笑子先生は保護者を招いたイベントで一輪車の演技を披露させました。もちろん、木村先生は、一輪車の経験など全くありません。しかし、それがきっかけで、1989年豊田一輪車クラブが誕生しました。木村先生は、一輪車クラブの生みの親で、一輪車競技に芸術的要素を取り込み新風を巻き起こした「仕掛け役」で、全国各地で一輪車クラブが誕生するきっかけをつくった立役者でもあります。



全国大会に向けての団体練習が始まりました。練習会場は、児童センターにある小さな体育館です。大会に挑むのは、小学生から大学生まで28人。テーマは「相手を思いやる気持ち」。木村先生は「手をつないだとき、前も後ろも信じないと絶対につなげない」と指導します。技術的な指導は全くありません。技術は、自分たちで磨いていくものとの考えです。繰り返し、繰り返しの練習で、4組のペアが同じ動きになった時、「心の温度が、やっと合ってきた」と冒頭の言葉が、木村先生から発せられました。そして全日本一輪車競技大会舞台演技部門には、全国各地から11チーム176人が参加。豊田一輪車クラブは、見事9度目の優勝の栄誉を勝ち取りました。しかし、これだけではありません。クラブに所属しているのは、大会に出る子どもたちだけではありません。小5の齊藤集成（はやせ）くんは社会性、コミュニケーション能力に自閉的特性が見られる広汎性発達障害を抱えていました。お姉さんの影響で一輪車を始めた集成くんは、出来ることが少しずつ増える一方で、我慢することを覚え、次第に変わっていきました。挙句は、低学年の子供の指導までできるようになったのです。「すべての子どもの温度を感じ取り、指導できる」。ここが、木村先生の指導法のすごいところだと考えます。



さて、学校や学級、そして家庭にも温度があります。その温度とは、温度計で測れるものではなく、温かい雰囲気のある学校や家庭と表現したり、構成者が自然とかもし出すある種の空気のようなものです。校長や担任、父親あるいは母親がかつかと燃え、その組織をどうするかと一人で温度を上げようとしても、教職員や生徒、家族が同じベクトルを向き、お互いに協調性をもって進むことができないと、絵に描いた餅と同じです。昨今では、虐待や家庭内暴力など、痛ましい事件や悲しい出来事が多発し、人と人の絆の希薄さが指摘されています。そうした問題の解決には、心の通い合う「場」を大切にすることが基本です。心には、自分も知らない潜んだ力があります。お互いの心が澄み、温度が同じになると、いつしか無限のパワーがみなぎってくるということです。要するに、心の温度を合わせるということは、学校や学級、家庭等の組織力をパワーアップさせることにつながってきます。特に教育においては、学校では教師と、家庭では親子の触れ合い、語り合う時間をできるだけ多く持つことが、子供の豊かな人間性づくりには欠かせないと思います。私も現在、先生方と面談を行っています。ぜひ、家庭でも語らいの場を設けたらいかがですか。そのこと自体がすでに「心の温度を合わせる」ことにつながっていると思いますから。

